

(第3種郵便物認可)

(第3種郵便物認可)

10月中旬から12月上旬ごろに通常の倍量の種もみを直播きし、翌年春に出芽、その年の秋に収穫する「初冬直播き栽培」。稲の種もみは春に播くものというこれまでの考え方を根本から覆す新しい発想の技術だ。規模拡大が進む担い手にとって、春作業の分散や省力化につながるなどメリットが多い。一昨年、今年と本紙で紹介した際の反響も大きく、注目度が日に日に増している。今年、状況を追った。

4年前に導入し現在90㍎  
新潟・上越市 穂海農耕

今年の生育を確認し、笑顔を見せる井馬さん(左)と佐藤さん



## 冬に作業できるのは大きい

### ポイント 種子コーティング、深度2㍍程度の浅播き

新潟県上越市で水田約230㍎を営営する穂海農耕は、90㍎でこの技術を取り入れている。同社が預かる田は南北10㍎弱、東西4㍎5㍎に広がる。約1350枚。地区ごとに超早生品種「超晩生」を主に10品種作付け、4年前から始め、

取り組み面積を増やすために試行錯誤しているところ」と説明する。すでに、V溝直播と湛水直播を併せ29㍎で取り組んでいるが、その作業時期ともかぶりにくい。播種は11月下旬。ソバの播種に使っていたクリ



11月下旬に播種



雪の下で越冬



4月下旬に発芽し始める



6月中旬。畦畔から雑草の侵入も見られることも



7月中旬の生育状況



9月上旬の刈り取り前。移植と収量が変りない年もある

# 春作業を分散・省力化「初冬直播き栽培」に反響

## 課題は除草対策、乾田直播と同様に防除を

### 大規模化には移植・直播のバランスが大事

課題は除草対策だ。防除方法としては通常の乾田直播同様、①出芽前に非選択制除草剤散布②入水直前にクリンチャーパ SME液剤散布③入水後初期除草剤や初中期一発剤、後期剤を1〜2回散布が基本となる。

井馬さんは「雑草対策の時期が田植えなど他の作業と重なる。タイムリグを逃すと防除しきれない。雑草の出方によって、剤の選択の判断が難しく、耕作する可能性もある。

そのためには移植と直播の割合のバランスを考え、直播きも選択肢の一つとして、技術を確立していきたい」と展望する。

大平さんは「真冬でも土中温度が氷点下まで下がることが少ない平場の多い新潟県に向いている技術。担い手の負担は年々増している。技術を確立し、普及につなげた」と話す。

## 多くの地域で50%以上の出芽率

### 温暖な地域は早すぎる播種に注意

同技術を開発した岩手大学農学部の下野裕之教授によれば、地温が氷点下を大幅に下回ると種は死ぬが、積雪があれば0度以上に保たれることが多い。温暖な地域では播種が早すぎると秋に出芽し、冬に枯れるので、注意が必要だ。播種量は北海道で10㍎当たり20㍎、東北や北陸で同10㍎15㍎を推奨

英、試験では多くの地域で50%以上の出芽率を実現している。現在、全国的には導入農家は約25軒で40㍎。月によっては全国各地の農家から、30件以上の問い合わせがあるなど注目度は増加傾向だ。試験では三重県や広島県、福岡県でも成功し、関東地方でも導入できる。大豆や麦に

使う播種機があれば新たな設備投資も基本的には不要だ。品種も限定しない。下野教授は食料安全保障の観点からも主食である米の安定的な生産は重要とした上で「初冬直播きは、品種を選ばず、今ある装備で簡単に始められる技術。規模拡大が進む担い手が10㍎20年後も安定的に稲作をする上で、選択肢の一つにしてみれば」とPRしている。

普及に向け、初冬直播き研究会を立ち上げ、ホームページ(二次元コード)で情報を公開している。

